

令和4年度 北海道小学校長会地区活性化支援事業【実践事例レポート】

- 1 報告地区：空知地区
- 2 事例報告学校名：岩見沢市立第一小学校
- 3 報告者職・氏名：校長 石原 学
- 4 キーワード：学校の力（課題・理念の共有、教科指導力、道徳目標の提示）

1 はじめに

本校は、昭和47年4月に市内2つの小学校が統合し、岩見沢市における統合学校の第一号として開校し、今年度開校51年目を迎えた。

市内には小14校・中9校があるが、本校の児童数（386名）は市内において最も多い小学校となっている。

校下には、岩見沢市発祥の地があり、また、JR岩見沢駅北部に隣接する住宅地及び広大な農地を校区とするなど、歴史と伝統を大切にしつつ「あたたかき心の持ち主たれ」を信条とした地域住民に支えられた学校である。



2 あたたかき学校づくりの取組

未来を予測することが難しく、また、多様な価値観が認められる現在において、本校が取り組むべき方向性は、「あたたかき学校づくり」である。

その柱となるのは、岩見沢市が掲げる「子どもが輝く岩見沢の教育づくり」で示された「子どもの声が響き合う『子どもと創る授業づくり』」と「『ピア・サポート』を通じた自尊感情と自己有用感の育成」である。

今年度、本校では「あたたかき学校づくり」のため、市の方針を踏まえつつ、①学習指導要領の趣旨を正しく理解した教科指導を行うことで「子どもと先生で（一緒に）創る授業」を構築すること、②道徳の授業と連動させたピア・サポートに全校体制で取り組むことで「無条件に相手を支える心」を育むことを中心に共通実践を行っている。

(1) 学校づくりの基本（課題・理念）の共有

上記に示した①②の推進のためには全職員での共通理解が欠かせないことから、学校としての課題を明確にすることはもとより、学校づくりの基本理念の共有に努めた。このことについては、職員だけではなく地域向けにも情報を発信し、地域一体となって取り組む素地をつくることのできるよう取り組んだ。

① 学校としての課題の明確化（図1）

学校課題の明確化のため、客観的なデータの中から、本校として特徴的な課題を抽出するとともに、経年変化を確認するように努めた。併せて、目標となる数値と検証の時期が自然な形で共有でき、端的に理解できるよう工夫した。

② 学校づくりの理念の共有（図2）

全職員で理念を共有するためには、職員が日常の教育活動の中で「心がけていること」や「困難を感じていること」をベースとしていくことが重要である。

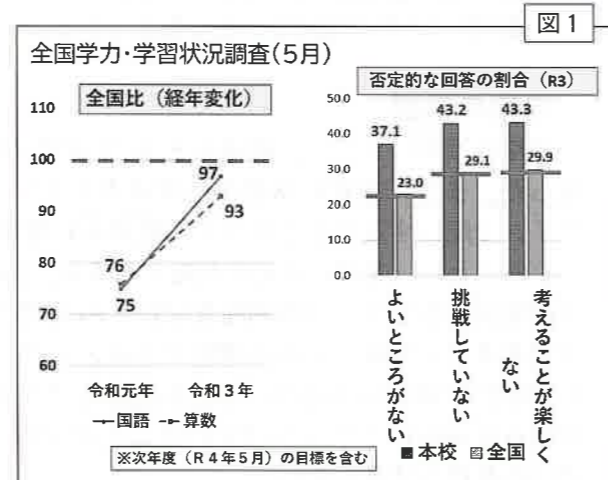


図1

本校においては、多様な価値観をもつ家庭が多く、通常の学級における特別な教育的配慮が必要な児童が多数在籍している。また、生徒指導上の課題に誠実かつきめ細かく対応する職員が多くみられた。それらすべてを肯定的に受け止めた上で構造化して分かりやすく示すよう工夫した。

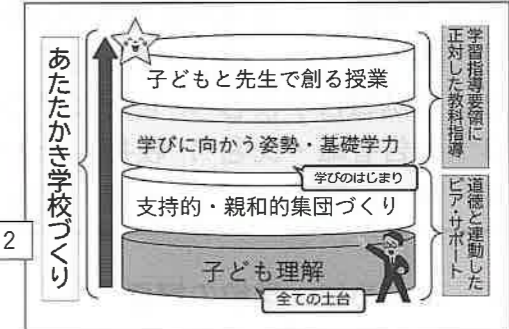


図2

(2) 学習指導要領に正対した教科指導

本校では、これまでの理論研究において「教えて考えさせる授業」（市川 伸一氏が提唱）を基本とすることにより、本時において「身に付けさせるべき資質・能力を具体化した上での指導（授業の前半「インプット」）」と「本当に身に付いたかを児童自身が確認する場の設定（授業の後半「アウトプット」）」に取り組んできた。

このことを基に、今年度から「学習指導要領の趣旨を正しく理解（正対）した教科指導」に取り組んでいる。具体的には、教科指導に当たっては、学習指導要領解説編を確認して身に付けさせるべき資質・能力を正しく理解すること、複数の教科書を比較検討して問題や課題の吟味・指導過程の工夫を行うことを前提としている。

定例の研修日においては、日常実践が正しい方向で進められているかを確認できるよう、文科省教科調査官 笠井健一氏（写真①）や教科書著作者、教育大附属小学校、北海道算数教育研究会研究部などの外部講師を招聘し、全学年での指導クリニック（写真②）を実施するなどして、毎日の授業づくりの充実に向けて取り組んでいる。



写真①



写真②

(3) 道徳と連動したピア・サポート

昨年度まで、岩見沢市の指定を受け道徳の授業づくりにも重点を置いて実践を繰り返してきた。このことを発展させるため、年度における道徳の重点目標を、特活とも関連付けるとともに、道徳・特活をつなぐ取組として「ピア・サポート」を位置付けて推進した。例えば、「道徳→（ピア・サポ）→学活→（ピア・サポ）→行事」など、重点目標を踏まえた道徳の授業をスタートとして、各教育活動を連動させるなど工夫した。ここで最も重要となったのは、道徳の重点目標の共有であった。学年に応じて高まりや深まりが意識できるよう提示方法を工夫（図3）した。



図3

3 終わりに

現在、年度途中であっても、できるだけ確認しうる成果と課題を全職員で共有（図4）しながら、教育活動のより一層の充実に向けて、ミドルリーダーが中心となって取り組んでいる。

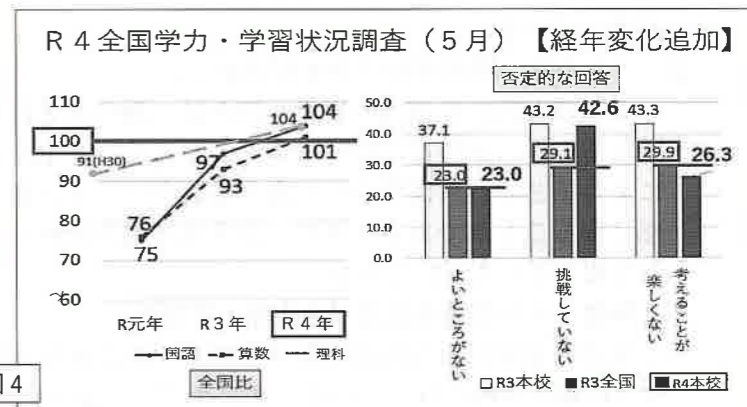


図4